

〔研究ノート〕

袋中著『南北二京靈地集』が引く

「天王寺略縁起」をめぐって

伊藤 純

一 はじめに

袋中が記した『南北二京靈地集』は、二つの京、上巻は南都（大和）、下巻には京（山城）に所在する寺社仏閣の実見・案内記である。下巻の京都編の最後に「已上山州」とあり。京都案内が終了したことを告げている。しかし、この後に「天王寺略縁起」と住吉大明神についての記述がある。

小文ではこれまで言及されてこなかったと思われる袋中が引く「天王寺略縁起」を紹介し、他史料と比較しながら、考えられるところを述べてみたい。

二 袋中と『南北二京靈地集』

まず、『南北二京靈地集』を記した袋中の略歴をおさえておきたい。¹⁾袋中は一五五二年（天文二二）磐城に生まれる。一五六五年（永祿八）満一三歳で出家する。東北・関東地方で法灯を伝えるとともに、諸学を習得し多くの著作を成した。一六〇三年（慶長八）満五一歳の時、中国・明への渡航を試みたが果たせず、琉球に留まり三年間を過ごした。一六〇六年に帰国、一六〇八年山城国山崎で「琉球神道記」を書いた。一六一一年京都・三条大橋の東に檀王法林寺を開いた。七〇歳を過ぎてか

ら南都を巡拝する。その後、南山城に住まいし、一六三九年（寛永一六）満八七歳で没した。

『南北二京靈地集』は一六二四年（寛永元）、袋中満七二歳の著作である。上巻には和州城事として、春日大明神事、大安寺事、元興寺事、東大寺大仏事、興福寺事、以下三五件についての記述がある。下巻には北京事として、賀茂明神事、貴船明神事、日高日宮事、鞍馬寺事、以下四三件についての記述があり、続けて摂州の「天王寺略縁起」、「住吉大明神」四五項目で本文の記述が終わる。

三 『南北二京靈地集』で引かれる「天王寺略縁起」

『南北二京靈地集』は既に翻刻されているので、「天王寺略縁起」（以下「袋中本」）は新出の史料ではない。⁽²⁾しかし、四天王寺研究や聖徳太子物語の研究で言及されているのを目にしたことがない。長きにわたるが、まず全文を掲載する。

なお、私の理解のために、片仮名を平仮名にし、読点を付した。発言の部分は「」で括った。さらに話の流れに沿って、適宜改行した。

（ ）は割註、（ ）は私・伊藤の書き入れ、文の傍らの①②③は、後段で他史料と比較するために付したものである。

天王寺略縁起

（上宮太子御誕生の所は、和州城しきよの上の郡、三輪の郷古蒙村、泊瀬河の辺り。⁽¹⁾機城嶋金刺の宮なり）

欽明帝十三年、善光如来、渡玉ふ。同十四年（一説に十九年と云）天下に疫発す。尾輿たたりの大臣（守屋が父）奏して云「先年将来の異形の神の祟たたりなり。願は彼者を失はん」と。頻に奏する故に勅許あり。即喜て向原寺を焼。如来を難波の海に投入上る。是仏法破滅の初なり。（太子未生以前のこと）

又、太子八歳（伝暦己亥_二五七九_一）、新羅より釈迦の銅像を貢す。時、守屋奏して、御受持を制す。太子、元興寺を立、之を安玉ふ。次で興嚴寺（向原寺）を立玉ふ。守屋、之を焼破る時、如来自ら堀江に入玉ふ。慧聰・慧便をば流罪、三比丘尼をも遠流す。

又用明帝〔在位五八五〜八七〕を咒咀し上る故に御悩あり。太子、大に悲み、御祈念看病有すといへ共、叶はずして、臨終近く見へ玉ふ。時に太子白して言「御臨終の時、正念にして、往生浄土を遂玉へ」と。時に帝云、「朕、三宝に帰せんとするに、守屋・〔中臣〕勝海等、妨る故に、空く過ぬ」太子白さく「百濟の兩僧を召出さされ、臨終の善知識となし玉へ」と。時に守屋座にあり「彼二僧は我朝の不吉の者なり。前朝二代〔欽明帝・敏達帝〕の勅勘の者なるを、重て召出されんや」と云て、大に怒る。蘇我の大臣云「我君の御最後の勅定なり。誰か背上べき」とて、二僧を召さる。時に守屋、見て大床より飛下、大に罵詈し、打擲に及て追出す。〔此時太子、二僧の柔和なることを、四依弘経の菩薩なりと歎じて、落泪有〕時に諸卿一同して云「下として上を侮る者、早く天上の札を削て、遠流か死罪か」と申さる。此時守屋は一人の言なれば、自ら退出す。即中臣勝海、弟の小連等に告云「我身朝敵と取成るなれば、日本国何れの処にも栖べき所なし。爾ば思切て、一合戦して討死して、名を後代に揚んと思は如何ん」と。組の衆一同して、「爾

べし」と云。密に談じて云う「崩御近し。河内の中尾の御陵〔現太子町・河内磯長原陵〕へ御葬送の帰に、太子を生捕にせん」爾して御陵近き所、河内の信貴の郡、木の下弓削に構をなし、稲村の城と名。〔諸村より稻を多く集る故に名く〕間に、五畿内の軍兵集て、雲霞の如し。二十九万三千余人と云。但し城内には、怪鳥鳴て、夢の告悪し。太子は此匄を聞召といへ共、更に驚き玉はず。唯天王の御悩を歎玉ふのみなり。御臨終に、御遺言には「先、守屋を恨玉ふこと深し」既して二僧を召す。慧便は浄飯王の御臨終を引て、念仏往生の義を勧上らる。〔私云、浄飯王の念仏御修行は觀仏経に出たり。極樂御往生は宝積経に出たり〕天王、弥陀の名号を唱へ、十念未だ終ざるに、西に向て遷化し玉ふ。時に紫雲空に充、異香室に薫ず。四十三歳〔五八七〕、六月二十八日と云。太子、大に悲歎し伏玉ふ。漸く御心付て、御遺体をば、即金瓶に入上る。

爾して合戦の御談合なり。諸卿皆「御葬送了て後」と白さる。太子一人の御意にて、「先、合戦して」と言。〔守屋が密談をば知らず。人皆後にこそ感じ知たり〕諸

卿又白して云「太子は久く不殺戒を持玉ふ。合戦の義は如何ん」と。太子言「悪人をは一殺多生す。菩薩の修行なり。縦たひ我は破戒に依て墮獄す共、仏法の為ならば、何ぞ悲まん。早く悪徒を誅罰して、大王の御憤を散じ上べし」と言て、周の武王の事を（武王の御父薨じ玉ひて、久しからずして、国王たる殷紂を討玉ふ）伯夷・叔齊が路の諫の事を宣玉ふ。へ伯叔二人、武王出陣の轡に取着て白して云「孝と云べしや。父死して久からざるに兵を起す。忠と云べしや。王を誅す」と、諫め申す。太公望見て云「是賢なり。咎むべからず」と云

爾して七月三日卯時（午前六時）打立て（月日異説あり。今は一途なり）日中に彼城近く寄玉ひ、魚鱗鶴翼の陣を張り、後に秦川勝・迹見いしき梶を御使として、牒状を遺さる。其略に云「汝我が朝廷を欺き、仏法を背故に、先、試に子細を尋んが為に、諸王子・諸臣、此に発向せらる。若もし先非を悔、逆心を改め、三宝に帰せば、同心せん者也。七月三日、阿児、弓削守屋江、云云」守屋、高樓に在て、暫くして返状あり。其略に云「吾朝は神國也。神道の一に帰して、仏法を廃失し玉はば、同心し上

るべきなりと。七月三日、弓削守屋謹言上、上宮太子江、云云」其日は是に暮ぬ。

翌朝（七月四日）打立。先陣は蘇我大臣、後陣は太子、合て二百五十三騎。是を五手に分、渋河の城へ着。五手を一度に接合もみあい、時の音を挙て懸る。彼城内には、少も騒さわざる体にて、三十万の人、亦一度に時の音を揚。をめき叫で、切て出、切て入。組ぐんで落、衝つて落。敵御方乱れ合、散々に闘といへ共、多勢に無勢、叶はずして、御方追靡なぶかざる。生駒山の麓に退き、暫しばく休切て又責戦。又追散されて、信貴山に退く。又暫して懸る。敵は大勢なるに誇ほこて、木戸を開て、馬の鼻を並べ戦間、数度の合戦に、人馬疲て、四方へ追散さる。太子も御一人と成。西の方へ引退玉ふ。敵、頻しきりに迫来る故に、前後に迷ひ、野原に棕ちくの木一本有。彼樹に對して、仏法利生の由を仰て「吾を助よ」と言ふ。時に此樹、忽たちに枝を垂、葉を動て、二に分る。御馬に乗つつ、中に入玉へば、樹、即合す。時に敵来て云「太子此にして見へ玉はず。本より神通不思議の人なれば、力及ばず」とて帰る。樹、開けて出し上る。太子御感有て「神妙なり棕の木」と、二たび

呼玉ふ。故に今に、神妙椋の木とて有。(後に樹下に堂を立。十六歳の影を自作有て立玉ふ。俗野中寺と云。寺号は大聖將軍寺)。爾して後に、落る勢を集て見玉ふに、三度の合戦に、一人も手負討死なし。守屋が勢は大に滅亡す。多くは同士討なり。悪逆は自滅する謂なり。此日も既に暮ぬ。

次の日七月五日なり。思玉ふは、願力あらしに非あらずは勝利を得難し。爾は四天王の威を假かりんとて、像を造んが為に材を求しむ。椿の大臣、山に入、樹を切て上る。是、勝軍木なり。大に喜玉ひ、長八寸に造り、像に向て誓玉ふ「今度速に勝利を得ば、大伽藍を立てて安やすずべし。昔釈尊、仏法守護の御約束、忘こと勿」と。是かくて、四人の大將の甲に、結着らると云。(一義、太子誓もとしりに納玉ふと云。私思ふ、今の義宜か。四大將を四天とし、自らは帝釈の御心か)「今日、父の大王の一〔初〕七日に当る。我、廢惡修善の孝行を成上るべし。旁あそばさ以怠あはれこと勿」と。爾して暁天に寄玉ふ。

④路みちに、阿多賀の村にして、八十歳計の翁、長八尺、薪を荷おほて行合上る。其材おとしは長一丈五尺余。回り二尺計の鉄

棒なり。白もようして云「某老体なれ共、軍法を存知せるなり。願は前陣もうちを許玉へ」と。太子喜て、即阿多賀の大臣と号して、「御召替の甲冑を着すべし」と。翁云「我身甲冑を着者に非ず。此鉄棒にして、城郭人馬、皆打破べし」とて、風を鳴して振。其勢恐し。

⑤又、信貴の西坂本にして、六十計の翁、梟を打者来て白して云「耕夫の身、憚はばかりなれ共、御許有は御供致し、合戦の名を揚んと存す」と。太子喜玉ひ、馬鞍甲鎧を着しめ、御劔を玉へり。十文字よなに佩よ、己が劔の柄を抜捨て、甲に結着たり。(是より劔形と云こと初れり)誠まことに角を戴く鬼神と見ゆる。是を坂本の大臣と名け玉ふ。此人は式々に兵を下知す。

⑥皆みな勇いさ進すすむ所に、又女性来る。人、是を制すれば女人云「知らずや。女人は軍の祝いわひなり。神功皇后、夷敵を平げ玉」とて、三日の鎬矢を上り「此矢にして凶徒を射させ玉へ」とて失ぬ。太子後に言「弁財天なり」と。

爾して押寄、合戦するに、鉄棒・鉄角に恐て、面を向者なし。此時守屋、楼やぐらの上にして、大音揚て云「口今、間近く見へ玉ふは太子かと覚。是は我氏神府都の明神の

放玉ふ矢なり。受玉へ」とて、八目の鎗矢を切て放つ。太子、鎗にして、蹴落玉ふ。守屋、射損たりと憤る処に、太子、棹に仰て云「女人が進ずる鎗矢にして、天地に誦文せしむ」大音揚て云。「我君聖徳太子の弘法利生を御助にて、四天王放玉ふ御矢なり。汝受よ」とて、暫く堅て切て放つ。此矢五色の光を放て、四方に乱転して、守屋が楼にして憤所の頸の骨射切て、倒まに落。御方一同に勝時の音を揚。守屋死する時に、大音陣中に響て「如我昔所願、今者己満足」と唱。太子又大音して、「化一切衆生、皆令入仏道」と次玉ふ。

爾して守屋は、四十二歳〔五八七〕、秋七月五日、朝の露と消ぬ。川勝、太子より下されたる「丙毛槐林」と銘うちたる靈劔引抜き、守屋が頸を切て、太刀の切崎に貫て「自業自得果、衆生皆如是」と唱て持參す。太子実檢有て「嗚呼哀哉、悪事は身に留」とて、涙を流玉ふ。彼子孫多く討れ、其外は数しらず。虜二百七十余人へ後に所々の寺に遣し奴婢とし、或は流罪せしむ御方は都て恙なし。

阿多賀の大臣、暇申す時、蘇我大臣袖を扣へ「有難き

大恩なり。誰人ぞ」と尋ぬれば「我は都率天に住せし文殊也」とて〔河内の遠地明神の本地なり〕、光を放て空に飛揚る。坂本大臣も同く、東方、信貴の峯を指て飛上る。蘇我驚て、大音して「誰人ぞ」と云に「南無大悲多聞天」と、二音唱て失にけり。太子聞召、峯に向て「信ずべし、貴むべし」と言故、夫よりして信貴山と号す。後に堂舎を立て、毘沙門を安じ玉ふ。守屋が田代、凡そ三十六万余町、并に屋宅等をば大分して、天王寺に付け、又武士の勇とし、又所々の伽藍に付せらる。

爾して七月十日に和州に還御なる。守屋が頸をば法隆寺の戌亥〔北西〕の角に埋玉ふ。時言「汝、今より悪心を止て、仏法の守護神と成べし」と。頸又唱「我願既満」と云。太子「衆望亦足」と、次玉ふ。法隆寺の鎮守、是なり。

抑此戦は、無明法性の空軍なり。其内証を云はば、守屋は勝軍地藏、太子は救世観世音なり。昔の契に、主と成り、臣と成。悪と成り、善と成て、仏法障碍の者は必ず滅する相を顕んと。互に約束ある故に、今仮に此戦を現じ玉ふ。釈迦に提婆、迦葉に花上等の如し。〔昔、迦

葉仏の時も、花上比丘、五逆を造て、無間獄に落つと云。地藏十輪経疏に云、衆生の忿怒は煩惱より起り、菩薩の忿怒は慈悲より起と云。今も爾なり。

太子還御有て、速に御棺の前に至らせ、落泪千行、白して云「守屋は仏法主法の怨なり。爾を急ぎ誅罰令ることは、御最後の御恨を早く散ぜんが為に、御葬送を押え上り、御本意を遂申す所なり。爾は、此世に妄執を留玉はずして、往生浄土の望を果たし玉へ。再会一仏浄土を期し上る」と言て、平臥、御心も失ぬ。暫して御心付て、御計有て、河内の中尾の陵へ、自ら御輿の後の長柄を御肩に懸、御歩素足にて、五里の間御行なる。往復の間の御愁歎、中中目もあてられず在す。〈私云、浄飯泥洹経云。浄飯王泥洹せしかば、仏躬棺を担んと欲。諸天来て跪て請して棺を担。仏手香炉を執、前行し玉ふ。已上〉

翌年十七歳〔伝暦戊申〓五八八〕にして、天王寺を立玉ふ。御法名は円通優婆塞也。〈昔南岳にて御住坊を円通大乘寺と云。是を取玉ふか〉

因に御入滅を明さば、四十九歳〔伝暦〓六二〇〕の春

二月五日、膳氏に語言「我、日域に仏法を流伝の為に生る。久く五濁に居せじ」又〔同廿二日〕言「我、今夕去ん。汝、伴なふべきや」乃ち妃と共に、沐浴新衣して、寝に入玉ふ。翌朝日上るまで、二人起玉はず。侍女見上るに、二人長逝し玉ふ。身体香し。両の屍輕し。只御衣の重き耳。其夜、紫雲音楽、瑞太だ多。即、科長の廟に送り上る。又御一門の極のことは、初入定御持来の經を、大兄の王子に譲玉ふ。王子壇上に崇め、六時に礼拝し玉ふ。

太子御入滅の後、二十五年に當て、十月廿三日の夜半に、此経、光を放て空に飛失。王子、大に歎。御廟に詣して、七日夜御祈あり。御経の末を知らせ玉へと。満る暁、御廟の中に光有て、妙音にて、法華の一の卷の終の偈を唱言。「無量無數劫、聞是法亦難、能聽是法者、斯人亦復難」と。王子云「誰人ぞや、示玉へ」と。時に光中に太子忽然として顕玉て言「我一期の化道尽しかば、又無仏世界に行て利生せん故に、吾多生の持経なれば、天人を使として召寄す。歎こと勿れ。縁謝即滅、機興即生の御経なり。王子達も此国の機縁尽たり。今より四十

余日の内に、吾一族、同時に此世を背て、我住所の安樂に來べし。安樂とは、天竺の未申〔南西〕に當て、天寿国と云あり。再會一國を期す」とて、失玉ふ。

後に皇極二年〔六四三〕十一月、蘇の入鹿、指たる恨みも無に、兵を率て、斑鳩の宮を攻む。〔頭註〕太子伝云く、入鹿謀叛の故に、鎌子一門三千人自害して、五色の鬼と成て、飛て黒雲の中に入。耳櫛峯にして又己が劍にかかると云。山背王子、〔太子の長子なり〕獸骨を以、寢に置て、子弟密に生駒山に陰玉ふ。兵者宮を焼。灰中の骨を見て、王子達焼死玉ふとて、喜て去る。六日有て王子、山をいでたまふ。左右入鹿を討んとす。王子云「彼大姓なり。恐らくは多く人を殺ん」とて、止玉ふ。即子弟二十三人〔太子と妃とを加て、二十五菩薩の心〕斑鳩の塔の中にして誓て云「我等蒼天の雲に昇り、浄土の蓮に座せん」とて、皆手に香炉を捧げ、黙然として住して皆死玉ふ。香烟上て、天に通じて、塔の上に靡く。男は天仙となり、女は天女と成て、雲に乗て西に飛去り、天花天樂、動地放光あり。世人仰ぎ見て、泣礼拝し上る。〔入鹿が父蝦夷、聞て歎て云「太子の尊族、逆に

逢て死玉ふ。我家亡んこと久しからじ」と云。明年蘇氏、皆滅すと云。

抑、四天王寺者、用明二年〔丁未〕〔五八七〕立。初太子、官軍を率て、守屋を討玉ふに、官兵三び退く。太子、四天王の像を刻て誓て言「官兵勝ことを得ば、寺を立、此像を安ずべし」守屋其日討たる。仍玉造の岸上に寺を立、像を安ず。守屋が所領を寺に付玉ふ。推古元年〔癸丑〕〔五九三〕難波の荒陵の東に移す故に、荒陵寺と云。此に池あり。荒陵池と云。青龍湧る。昔、釈尊天竺にして行化し玉ふ。頃をひ、此日本摂州に、育伽長者と云者あり。若宿縁有や。如來の出世を感じ上り、此土に請じ上る。如來、來り玉ひて、此地にして説法し玉ふ。長者供養し上る所なるが故に、此に寺を移玉ふ。其長者は太子の先生なり。宝塔・大殿、極樂の東門に對す。茲に因て額を顯玉ふ。太子、髻髮六莖を抜き、仏舍利六粒とを、塔の中の柱に籠玉ふ。六道を濟ことを表す。諸堂・諸門、具に述難し。

四 文保本『聖徳太子伝記』との比較

鎌倉から室町時代、いわゆる中世において聖徳太子を主題にした物語で、一三一八年（文保二）頃に成立したとされる『聖徳太子伝記』^③（以下「文保本」）は重要な位置を占めている。文保本は「聖徳太子伝記類のなかで中世的展開を示す最も代表的な伝記で、中世書写の現存伝本も比較的多いことから、鎌倉末期にはかなり広範に流布したものであろう」^④と評価されている。袋中本の「天王寺略縁起」は仏教の導入をめぐる物部軍との合戦譚が大半を占める。文保本「太子十六歳御時」の叙述、物語の展開に一見すると似通っている。このことから、『南北二京霊地集』中で袋中は「天王寺略縁起」を記すにあたって文保本か、あるいは文保本系の本を見ていたのではないかと推測される。

先に、袋中本で付しておいた①②③の箇所について、文保本での記述と比較してみたい。

袋中本①「和州城の上の郡、三輪の郷古蒙村、泊瀬河の辺り。磯城・鳴金刺の宮」

文保本では「大和国城上郡、三輪郷古蒙村、泊瀬河辺磯城・鳴金刺宮」（聖徳太子全集二八六頁）

袋中が文保本からの転記の際にミスしたのか、袋中が見た文保本系の別本に「磯城」が「機城」と書かれていたのかもしれない。

袋中本②「椋木」

文保本では「櫛木」（聖徳太子全集三三四頁）

櫛木は紫檀に似る堅木、アサ科の落葉高木。植物学的な詮索をするつもりは毛頭ないが、文保本から袋中本までの間で櫛木から椋木に変わったのか、あるいは袋中自身が櫛木を椋木と書き換えたのか。

袋中本③四天王像の材を「勝軍木」と表現。

文保本では四天王像のために「霊木」を求め、樹種を「白膠木」と記述。（聖徳太子全集三三七頁）

袋中本④阿多賀村で太子軍に加勢する翁の話は、文保本では登場しない。

袋中本⑤信貴の西坂本の翁の話も、文保本では登場しない。

袋中本⑥女性の話も、文保本では登場しない。

袋中本⑦「守屋は、四十二歳」

文保本では「守屋生年四十六と申」（聖徳太子全集三三九頁）

袋中本⑧「丙毛槐林」

文保本では「百毛槐林」（聖徳太子全集三三九頁）

太刀の銘の読みが異なっている。文保本以降に銘の読みが改められたのである。ちなみに今日では「丙子椒林」と読まれている。

袋中本⑨太子実檢有て「嗚呼哀哉、悪事は身に留」とて、涙を流玉ふ。

文保本では登場しない。

袋中本⑩「守屋が頸をば法隆寺の戌亥の角に埋玉ふ」

文保本では登場しない。

袋中本⑪「守屋は勝軍地蔵、太子は救世観世音」

文保本ではこのような表現はない。

袋中本⑫「御歩素足」

文保本では「歩行」（聖徳太子全集三四〇頁）

袋中本⑬以下の記述は、文保本では見出せない。

聖徳太子物語において、中世社会で主導的な位置をし

めていた文保本（一三二八年頃）を引いて、袋中本（一六二四年）の「天王寺略縁起」が記されたものと思い、文保本の「太子十六歳御時」の記述と比較してみた。物語の大筋は似ているものの、異なる部分も多いことも事実である。

文保本では合戦において、太子を支援する④・⑤・⑥の助太刀の話は登場しない。⑩の守屋が頸を法隆寺に埋めたという話、⑪の守屋は勝軍地蔵、太子は救世観世音という説など、文保本と袋中本の違いは大きい。

加えて、袋中本②では「椋木」が、文保本では「欄木」。袋中本③では「勝軍木」が、文保本では「靈木」。「白膠木」。袋中本⑦では「四十二歳」が文保本では「四十六」。袋中本⑧では「丙毛槐林」が、文保本では「百毛槐林」。袋中本⑫「御歩素足」が、文保本では「歩行」というように、いくつかの固有名詞的な用語にも違いが認められる。

これらの事実から、袋中は文保本から直接的な引用で「天王寺略縁起」を書いたのではないことが分かる。

五 袋中本に近似する寛文本『聖徳太子伝記』

文保本（一三二八年頃）と袋中本（一六二四年）を比較し、文保本にはない話、相違する箇所が袋中本では見られることを指摘した。

近世における聖徳太子物語の普及を担ったとされる寛文本『聖徳太子伝記』（以下「寛文本」）がある。寛文本『聖徳太子伝記』は一六六六年（寛文六）に版行されたものである。^⑤一六三九年（寛永一六）に没した袋中と、一六六六年（寛文六）に版行された寛文本とは一見無関係のように思える。しかし、袋中本と寛文本を見比べると近似した表現が多いのである。

以下、袋中本と寛文本の近似している部分を確認していきたい。

袋中本①「和州城の上の郡、三輪の郷古蒙村、泊瀬河の

辺り。機・城嶋金刺の宮」

寛文本では「磯・城嶋金刺宮」

「機」と「磯」、これを見ると、袋中の単純なミスの可能性がある。

袋中本②「椋木」

寛文本でも「椋木」。文保本「欄木」↓袋中本「椋木」

↓寛文本「椋木」となる。（牧野編『聖徳太子伝記』九八頁）

袋中本③「勝軍木」

寛文本では「唐土にては白膠木と云、又勝軍木といひて、いくさかつ木とかきたり」と「勝軍木」が認められる。（牧野編『聖徳太子伝記』九九頁）

袋中本④阿多賀村で登場する翁の話

寛文本では「阿多迦峯へうちあがつて…（中略）…一人の山人薪を荷てきたりけるが、太子の無勢なることを歎給ふをよくよくうけたまはつて、をひたるたきぎをなげすて申やう、かくのごとくいやしき身にて侍れども、仏法ひろめがたく逆臣がうぶくしがたきよしをうけ給り…（中略）…よはひ五十あまりなり。たけたかくその身おほききにしてまなこかしこく、ちから人にすぐれたり。そのをうこのながさ一丈あまりなり。…（中略）…能々見れば、たけは八尺ばかりにて…」と、文保本にはない袋中本と同じような内容の話を載

せる。(牧野編『聖德太子伝記』九九―一〇〇頁)

袋中本⑤信貴の西坂本の翁の話

寛文本では「一人の老翁あつて山のふもとに畠をうち侍るが、この老翁うけたまはり、とねり丸に申やう、儲君の詔をうけたまはりて侍るに、かんるいしのびがたし。我弓箭を帯する身にて侍らず。賤身なりども、わが君の御ともつかまつり、…(中略)…弓箭を帯せずただ鋤鎌のみとる身なればいかんか侍るべきとてなみだをながしけり。…(中略)…紫威の鎧・白星の甲を着せ、大中黒の矢を山のごとくとりつけて御剣をたまはりて十文字にはき、おほきなる弓のつる音鈴々と鳴して侍りける。…(中略)…この老翁さかもとよりまいりたればとて、坂本臣となづけ、又阿多迦よりまいりたらむとて阿多迦臣となし給ひける也」(牧野編『聖德太子伝記』一〇〇―一〇一頁)

袋中本⑥女性の話、寛文本では登場しない。

袋中本⑦「守屋は、四十二歳」

寛文本では「ときに守屋四十二歳なり」(牧野編『聖德太子伝記』一〇二頁)

袋中本⑧「丙・毛槐林」

寛文本でも「丙・毛槐林」とある。(牧野編『聖德太子伝記』一〇二頁)

袋中本⑨太子実検有て「嗚呼哀哉、悪事は身に留」とて、泪を流玉ふ。

寛文本は「あはれなり。逆悪は身にとどまるとはこの事也」(牧野編『聖德太子伝記』一〇三頁)

袋中本⑩「守屋が頸をは法隆寺の戌亥の角に埋玉ふ」

寛文本では、「守屋の大臣・中臣の勝海以下八のくびをば、法隆寺の廻廊戌亥の第三間のはしらの下にふかくうづませ、孝養とも侍りけり」(牧野編『聖德太子伝記』一〇四頁)

袋中本⑪「守屋は勝軍地藏、太子は救世観世音なり」

寛文本では、「太子はこれ観音の顕現、慈悲利生の薩埵なり。守屋はすなはち地藏菩薩の変化なり」(牧野編『聖德太子伝記』一〇五頁)

袋中本⑫「御歩素足にて、五里の間御行なる」

寛文本では「五里の道をかちはだしにてはるばると御幸をなし…」(牧野編『聖德太子伝記』一〇六頁)

袋中本^⑬以下の記述は、文保本では見出せなかったが、寛文本でもこのような記述はない。

以上のように見てくると、袋中本と寛文本とは共通する表現が多いことが分かる。袋中本は古くに創作された文保本よりも、後に発行された寛文本と近い関係が指摘できる。

六 まとめにかえて

— 文保本・袋中本・寛文本の関係 —

袋中本と文保本、袋中本と寛文本を比較してきた。中世以降の聖徳太子物語において主動的な位置を占めている文保本であるが、袋中本には文保本にはない話がかわっており、いくつかの用語も異なっていることが分かった。

袋中が文保本を下敷きにしながらも、自ら新作の「天王寺略縁起」創作した可能性を否定することはできないが、これはあり得ないことであろう。一方、袋中本よりも後に発行された寛文本には、袋中本にあつて文保本にはない話が盛り込まれており、用語も袋中本と寛文本が

共通していることが多い。袋中が後に出した寛文本を知っていたことは絶対により得ない。しかし、袋中本は文保本よりも寛文本と近似している部分が多い。この事実をどのように考えたらいいのだろうか。

ここに一つの推論が浮かんでくる。中世以降、聖徳太子物語は文保本を出発点として、時々々に写され、少しずつ筆が加えられて変化し、寛文本は一六六六年（寛文六）に版本として刊行される。版本として刊行されるのである。ここが重要である。版本・寛文本以前に、稿本としての聖徳太子伝記が存在していたのではないか。私には存在していたとしか思えない。しかも、その「稿本聖徳太子伝記」が『南北二京霊地集』の一六二四年以前に、袋中が見ることができている状態で存在していたのではなからうか。

文保本（一三二八年頃）↓〔稿本聖徳太子伝記〕↓袋中本（一六二四年）↓寛文本（一六六六年）という流れが見えてくる。しかも、文保本から袋中本までの三〇〇年の間に次々と新たな話が創作され聖徳太子物語が成長していくのである。「寛文本」の内容は中世撰述の太子

伝をほぼそのまま踏襲するものであることは、中世撰述にして最も流布した文保本と比較すると一目瞭然であり、文保本の真名体表記を殆ど延書きにしたにすぎない部分が多いのである^⑥というような簡単な説明で終わるものではない。袋中本の「天王寺略縁起」から、文保本以降にいくつもの話が追加され寛文本として結実しているのである。

七 おわりに

長々と袋中本の「天王寺略縁起」を掲載し、他本の聖徳太子一六歳の記述と見比べてみた。その結果、袋中本が成立した一六二四年以前に、寛文本（一六六六年）の底本となる稿本があったのだろう、という小さな見通しを得たにすぎない小文に対して諸賢の御寛恕を乞うものである。

元々は奈良大和の寺社仏閣についての認識の過程を知りたく、地誌類を探していたところ『南北二京霊地集』に出会った。頁をめくっていると「天王寺略縁起」が目に入ったのである。聖徳太子が創建した四天王寺の縁起

といえは一〇〇七年（寛弘四）に出現した「御手印縁起」が知られているが、袋中が引く「天王寺略縁起」には初対面であった。中世以降に作られた聖徳太子物語については全く無知だったので、「天王寺略縁起」がいかなるものなのかを知るため、急遽手近にあるいくつかの文献に目を通した中間報告がこの小文である。

文保本にはない袋中本の⑩法隆寺の北西の角に守屋の頸を埋めたという話と関連するような『善光寺縁起』で四天王寺の北東の角柱に守屋頸を納めたという記述、また現善光寺の内々陣に「守屋柱」と呼ばれる角柱があること、現四天王寺に「守屋の祠」があること。袋中本⑪「守屋は勝軍地藏、太子は救世観世音」など先行研究^⑦に学びながら、ほちほちと考えてみたい。

聖徳太子と物部守屋の物語をめぐる、もうしばらく楽しめる時間が続きそうである。

註

- (1) 藤堂祐範「袋中良定上人伝」『増訂新版浄土教文化史論』（山喜房仏書林 一九七九年）、「袋中上人・西方寺関係年表」（『筒城』六〇輯 二〇一五年）、高次

喜勝「やまのおっさん」(『月刊大和路 ならら』二

〇二〇年二月〜九月号まで八回連載)。

(2) 横山重編『琉球神道記』(大岡山書店 一九三六年、

角川書店 一九七〇年復刻)、版本の影印は近世文学

資料類従古板地誌編一五『吉野山独案内 南北二京靈

地集』(勉誠社 一九八二年)。

(3) 翻刻は『聖徳太子全集』第二巻(臨川書店 一九八

八年、一九四四年初版)。

(4) 牧野和夫「解題」(『中世聖徳太子伝集成』第二巻

勉誠社 二〇〇五年)。

(5) 翻刻は伝承文学資料集成一輯 牧野和夫編『聖徳太

子伝記』(三弥書店 一九九九年)、杉本好伸編『聖徳

太子伝』(国書刊行会 二〇一一年)。

(6) 牧野和夫「略解題」(『聖徳太子伝記』三弥書店 一

九九九年)。

(7) 松本真輔「中世聖徳太子伝における物部守屋像―怨

靈化する守屋・地藏の化身としての守屋―」(初出二

〇〇三年『聖徳太子伝と合戦譚』勉誠出版 二〇〇七

年所収)

参考文献(刊行年順)

一九六九年 高橋貞一「聖徳太子伝寛文刊本の成立」(『仏

教文学研究』八集 法蔵館)

一九七一年 阿部隆一「室町以前成立聖徳太子伝記類書

誌」(『聖徳太子論集』平楽寺書店)

一九七四年 嶋口儀秋「聖徳太子信仰と善光寺」(『太子信

仰』雄山閣 一九九九年所収)

一九八一年 牧野和夫「中世の太子伝を通して見た一、二

の問題(1)」(『中世の説話と学問』和泉書院 一九

九一年所収)

一九八五年 牧野和夫「絵解きと聖徳太子絵伝」(『中世の

説話と学問』和泉書院 一九九一年所収)

一九八六年 渡辺信和「寛文六年板『聖徳太子伝』とその

絵伝」(『聖徳太子説話の研究』新典社 二〇一二年所

収)

一九八八年 牧野和夫「中世の聖徳太子伝記・注釈書の世

界から」(『中世の説話と学問』和泉書院 一九九一年

所収)

二〇〇四年 松本真輔「悪役守屋の形成過程」(『聖徳太子

伝と合戦譚』勉誠出版 二〇〇七年所収)

二〇〇五年 川上新一郎「解題」(『中世聖徳太子伝集成』

第三巻 勉誠出版)

二〇〇七年 松本真輔「橘寺の略縁起と聖徳太子伝」(『近

世略縁起論考』和泉書院)

二〇〇七年 加藤基樹「近世寺社宝物略縁起の生成と展

開」(『近世略縁起論考』和泉書院)

二〇一〇年 榊原小葉子「地誌としての寛文刊本『聖徳太

子伝記』(『太子信仰と天神信仰』思文閣出版)

二〇一一年 杉本好伸「緒言」〔聖徳太子伝〕国書刊行
会

二〇一一年 杉本好伸「解説」〔聖徳太子伝〕国書刊行
会



神妙椋樹（大聖勝軍寺／大阪府八尾市）